

琉球語系統論の再考

橋 尾 直 和

1. はじめに

従来の比較言語学的研究によれば、日本語と琉球語は日琉祖語 (Proto-Japonic) に遡る姉妹言語であり、日琉語族に「琉球語派」と「日本語派」を設定し、両者の分岐年代は、上代日本語の話されていた奈良時代より前であると推定されている。

宮良信詳氏は、ジャポニック語 (Japonic Language) という名称を採用し⁽¹⁾、それを日本語と琉球語派の祖語として定め、「日琉語族」ではなく「ジャポニック語族」を用いて、以下のように提案している (宮良 2011 : 14)。

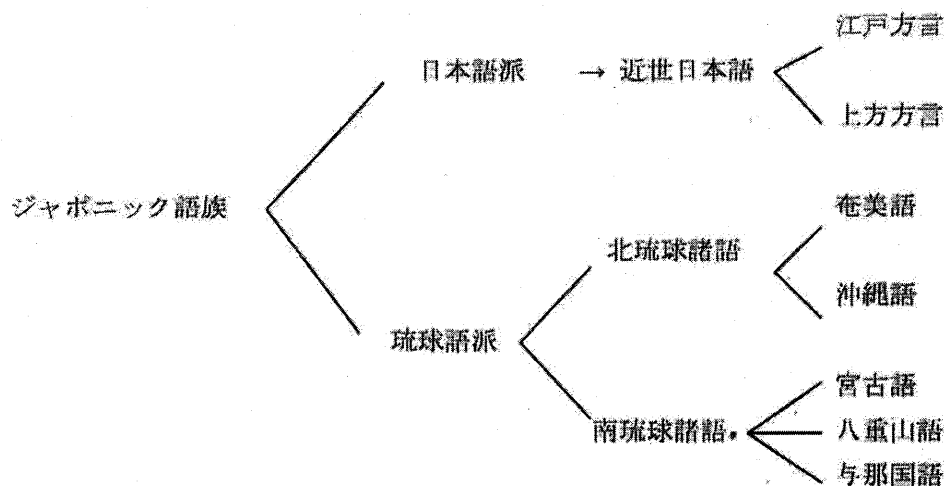


図1 ジャポニック語族の言語系統 (宮良 2011 による)

最近、この現代日本諸方言の祖語を「日本祖語」とし、上代日本語とを暗に同一視した説に対して新説が提案された。五十嵐陽介氏の「琉球語を排除した『日本語派』なる系統群は果たして成立するのか? —『九州・琉球語派』と『中央日本語派』の提唱—」(2016) である⁽²⁾。

新説の要約は、次のとおりである。

- (1) 九州方言に観察されないが、その他の日本語諸方言に観察される言語改新がある事実は、九州方言を除いた日本語諸方言からなる系統群の存在を意味する。
- (2) 琉球語諸方言と九州方言が特定の言語改新を共有している事実は、琉球語と九州方言からなる系統群の存在を示唆する。
- (3) 上の2つの事実から、琉球語諸方言と九州方言からなる系統群（「九州・琉球語派」）と、（すくなくとも九州方言を除く）日本語諸方言からなる系統群（「中央日本語派」）が定義される。

(4) したがって、すべての現代日本語諸方言を子孫に持つ「日本語派」なる系統群は成立しない。

五十嵐 (2016 : 13) は、「もし琉球列島の諸方言を独立の言語とみなすのであれば、系統論の観点からは、琉球語と姉妹関係にある九州の諸方言も「九州語」として独立の言語とみなさなければならない。この場合、琉球語と日本語とを二大系統群とみなすことを含意する「日琉語族」という名称がその根拠を失うことになる。「日本語族」(日本語族琉球語、日本語族九州語、日本語族中央語など)と言い換えるか、あるいは英名の Japonic をそのまま用い、ジャポニック語族と呼ぶべきであろう。(これを「日本列島語族」と訳すのも一案であろう)。私見では、本発表の「九州・琉球語派」を「南日本語派」と言い換えたうえで、九州、琉球の言語を、それぞれ「日本語族南日本語派九州語」「日本語族南日本語派琉球語」と呼ぶことで、他の Japonic 系統の諸言語(中央語や東日本の言語)をも考慮に入れた場合、それぞれの言語に統一性のある名称を与えることが可能になる」としている。

筆者は、この「九州語」を認める意見には賛同する。ただし、九州語の位置づけについては、異論がある。なぜならば、分子生物学(DNA)・遺伝子学・考古学・言語学の学際研究の立場から導き出された日本列島の言語史は、「九州語派」から「琉球語派」へと分派したと見なす方が、これまでの矛盾点を解消してくれるからである(崎谷 2009a, 2009b)。

本稿では、琉球語の系統について、最新の分子生物学(DNA)・考古学・言語学の成果を援用して考察し、従来の琉球語系統論を再考し、新説を提唱することを目的とする^③。とりわけ、琉球語と九州語との位置づけについて、新説を導くことを試みたい。

2. 遺伝子で見える琉球列島の歴史

ここで、最新の分子生物学(DNA)・遺伝子学による、「琉球の祖先の移動」について考察したい。日本人および周辺諸国の人々の遺伝子分析を駆使した、遺伝子学を専門とする論文である、篠田謙一(2007a)・(2007b)・(2015)、崎谷満(2005)・(2008)・(2009a)・(2009b)から、琉球の祖先たちの移動のシナリオを整理すれば、以下のとおりである。

琉球とは、かつての琉球王国の範囲を指し、薩南諸島から大隅諸島(種子島・屋久島など)とトカラ諸島を除き奄美諸島のみを琉球に含み、奄美諸島と沖縄諸島とを北琉球、先島諸島の宮古諸島と八重山諸島を南琉球という。

琉球の先史時代は、日本列島中間部とはかなり異なる。北琉球の歴史は、7,000年前から始まる漁労を中心とした貝塚文化に代表されるが、縄文文化とは本質的に異なる。これに対して南琉球では、貝塚文化と本質的に異なる先島先史文化が、4,000年前から興っている。紀元後11~12世紀頃より、南北に共通するグスク時代へと移り、琉球諸島全体が一つの文化圏へと統合されていった。14世紀から沖縄本島に三つの政治勢力が興り対立した後、1429年に統一王朝時代へと移った。

DNA 多型分析における Y 染色体重型^④の分布から、北琉球先史時代人でもある貝塚文化人については、まだはっきりしたことが分かっておらず、南方系と考えられる C1 系統の可能性が考えられる。形質人類学からも、貝塚文化人は、中間部縄文人 D2 系統と異なることが指摘されている。もしそう

であるならば、南九州で貝文文化を興した集団が、北琉球では貝塚文化を興したということになる。その他には、南方島嶼部に特徴的な M 系統・K 系統・他の C 系統などの集団が、貝塚文化を担った可能性がある。

南琉球の先島先史文化人については、台湾やフィリピンなどのオーストロネシア系文化の影響にあったことが推定されており、現在でも、オーストロネシア系文化が先島諸島に色濃く残っているので、O1 系統の可能性が高そうである。また、貝文文化人 C1 系統が先島先史文化に関係していた可能性も同時に想定できる⁽⁵⁾。

こうしたことから、琉球諸島の先史時代の住民は、日本列島中間部の縄文人 D2 系統集団とは異なり、C1 系統・O1 系統が想定される。これは、琉球諸島先住民が C3 系統・D2 系統のアイヌ民族の祖先とは異なる集団だったことを指示する。つまり、アイヌ琉球同系論およびその前提となっている二重構造モデルは、琉球において支持されないことを意味し、形質人類学からも同じような見解が表明されている⁽⁶⁾。

この状況は、グスク時代の到来とともに様変わりしてしまう。形質人類学からは、先史時代とは異なり、グスク時代の琉球諸島集団は、日本列島中間部とあまり相違ないという報告がなされており、先史時代とグスク時代とでは、琉球諸島において集団の大きな交替が起きたことが指摘されている。これは、DNA 多型分析からも支持され、北琉球で先史時代の C1 系統からグスク時代以降の D2・O2b・O3 系統への交替があったと推定される⁽⁷⁾。

交替には理由があり、グスク時代において、西九州・長崎産の石鍋が南北琉球全域で流通するようになり、徳之島に亀焼窯が設置され、石鍋とともに亀焼が流通する経済圏が琉球諸島全体で形成されるようになる。この変化は、琉球内部の発展というよりも、九州からの人の流れが決定的な役割を果たしたと推定される。同時に、先史時代の非琉球語から、九州よりもたらされた日本語系の琉球語への転換も引き起こされた。その流れは、北琉球にとどまらず、南琉球を含む琉球諸島全域にまで及んだようである。グスク時代には、農耕も始まっている。

琉球民族は、日本列島中間部と北海道で共通する縄文文化を欠き、琉球国という独自の国家を 500 年間維持し、独自に中国との外交関係を築いて、東南アジアや朝鮮半島などとも広範な交易関係を結び、多くの海外文を独自に取り入れてきたという形成過程を経ているため、狭義の日本文化の範疇では捉えきれない文化的伝統を築いてきたことになる。

Y 染色体では、D2 が日本固有の型として取り上げられることが多いが、ミトコンドリア⁽⁸⁾で、それに当たるのが M7a である。M7a は、沖縄・アイヌを含む日本列島で広く見られる。その一方で、朝鮮半島に少数存在する以外、外国にはほとんど見られない。M7a の比率は、沖縄で約 25%、アイヌで約 16%、本土の日本人で数%である。沖縄とアイヌに多いので、縄文的と言える⁽⁹⁾。

M7a は、M7b・M7c と近く、M7b は台湾から華南に、M7c はフィリピンに多い。これらは、スダンランド起源とされている。沖縄県石垣島の白保竿根田原洞穴で見つかった旧石器時代の人骨のミトコンドリアも、4 点中 2 点が M7a だった。この M7a が、シベリア系とされる北海道・東北の縄文人からも、華北系と考えられる関東の縄文人からも見つっている。現代と同様、縄文時代の段階で、M7a

はすでに日本列島に広く分布していた。

では、この M7a は、どのようにして日本に持ち込まれていたのだろうか。現在、シベリアにも華北にも M7a は見られない。また、上記のように、M7a は南方系（スンダランド系）と考えられている。従って、北海道・東北や関東の縄文人が、M7a を彼らの故郷のシベリアや華北から持ち込んだとは考えにくい⁽¹⁰⁾。

もう一つ考えなくてはならないのが、北海道・東北の縄文人のミトコンドリアが非常にシンプルな構成である点である。もし、新しい時代にシベリア系と南方系の遺伝子が混ざったのなら、もっと多くの種類のミトコンドリアが見つかるはずである。

こうしたことを考えると、M7a が持ち込まれたのは、旧石器時代の初めの台形様石器・局部磨製石器の時代以外に考えられない。旧石器時代の石器は、「台形様石器・局部磨製石器」から「石刃技法によるナイフ形石器」へ、そして「細石刃」へと変化したと考えられる。ナイフ形石器の時代以降は、列島内に石器の地域差が現れるが、台形様石器・局部磨製石器の時代には地域差がまだなかった。

旧石器時代の初め、台形様石器・局部磨製石器が日本に広まったが、これらの石器は M7a とともに、南方から持ち込まれた。次に、石刃技法を以て集団が、華北から本土に、シベリアから北海道にやって来た。さらに、次の細石刃の時代には、シベリアからの集団が津軽海峡を越え、東北地方に進出した。この M7a を持った集団が、琉球列島を通過して、本土にやって来た可能性が高い。

3. 琉球語の成立過程

次に、分子生物学（DNA）・遺伝子学・考古学による、「琉球語の成立過程」について考察したい。崎谷（2009a）・（2009b）、高宮（2005）・（2010）などの分子生物学（DNA）・遺伝子学・考古学の研究成果を参照しながら、琉球語の成立過程のシナリオを整理すれば、以下のとおりである。

琉球語の分類の一例は、北（奄美・沖縄諸島北部・沖縄諸島中南部）・南（宮古・八重山・与那国）というものである。こうしたことから、日本語圏としての本来の地域は、日本列島中間部に限定するのが適切だと思われる。日本語と琉球語は同系統の言語であるが、アイヌ語は両者とは別系統で、世界的に見ても孤立言語と見なされる。

日本列島の中間部では、19 世紀まで地域語間あるいは方言間の差異が非常に大きく、時には相互疎通性を欠くほどの違いが認められた。日本列島中間部の諸語の分類例の一つが、九州（西九州・南九州・北東部九州）・西部日本（山陽山陰・四国・関西・出雲・北陸・中京）・東部日本（東海東山・関東・八丈島・東北）で、九州語は相互の言語学的差異が特に大きく、そのなかでも西九州語内部の差異が特に大きいと指摘されている。

一般に言語的差異の大きい地域は、言語発祥の地と見なされ、日本語の成立において九州、特に西九州の重要性が注目されている。逆に、広い地域で言語の共通性が認められる場合は、二次的な言語交替が起きた可能性があり、本州語地域では、関西語・北陸語・東海東山語・関東語・東北語などが挙げられる。

日本語の成立過程については、まだ有力な仮説がほとんどない状態であるが、DNA 多型分析におけ

る Y 染色体亜型の分布から、渡来形弥生人の O2b 系統集団が、元々はオーストロアジア語族だったとすると、渡来形弥生人は母語を喪失し、移住先の日本語を使用するようになったと考えるのが妥当である。ただ、日本語のなかの水稻文化関連の用語とオーストロアジア系言語との近親性が報告されており、O2b 系統集団が日本語に与えた影響もあると思われる。

日本語祖語を日本列島に持ち込んだ可能性が高いのは、縄文系集団の中心である D2 系統である。旧石器時代以来、日本列島は多様な文化を育んできており、新石器時代草創期・早期の日本列島では、さまざまな系統の言語が使用されていたと考えられる。しかし、新石器時代前期以降、地域性を残しながらも、次第に縄文文化による共通性が見られるようになり、結果的には D2 系統集団が日本列島で多数を占めるようになったと考えられる。

D 系統は、15,000 年前かそれ以前に、東南アジアを経てユーラシア東部を陸伝いに北上してきたとも考えられており、現代オーストロネシア系言語の基層語となっているものの、現在では消滅してしまった諸言語との接触があった可能性もある。従来の日本語・アイヌ語系統論では、オーストロネシア系言語との接触の可能性が想定されていたが、D 系統の移動経路を考慮すると、その可能性も十分にある。D2 系統がまとまって確認できるのは、日本列島だけであるので、日本祖語と同系統の言語を世界中で探しても発見できなかったのは、当然だったと言える。

板橋義三氏は、板橋（1999：54）の中で、日本語の成立過程を収束型言語の一種である混成言語によるものと位置づけている。そして、単純な図式として、日本祖語はオーストロネシア系言語とツングース（アルタイ）系言語が接触して、前者の基礎語彙の一部と文法項目の一部、そして後者がその他の語彙と文法事項の大部分を占有する混成的な言語であることを、下の図のとおり示している。

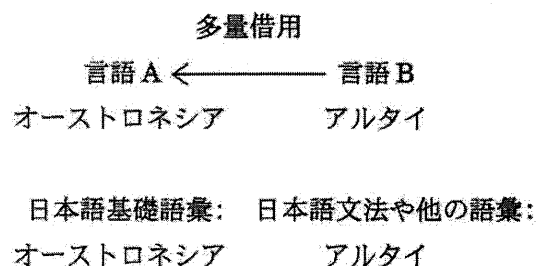


図 2 日本語の収束型混成言語モデル（板橋 1999 による）

この説の根拠は、語彙と文法を異にする場合の非系統的（収束的）発達には、(1)多量（文法）借用、(2)言語入れ替え、(3)ピジン之母語化が考えられるが、日本語の場合は、(1)は二言語間接触、(2)(3)は多言語間接触が基本的には歴史的事実としてあり、それが前提になっており、(1)が主で(2)が従といったケースの相当する可能性があるとする。

また、(1)多量借用（＝語彙や文法の借用）の場合、（最小限に保持された＝語彙レベルの）オーストロネシア系言語 A がアルタイ系言語 B から語彙や形態素なども借用することによって日本語が形成されたとすると、日本語の基礎語彙はオーストロネシア系言語 A からそのまま継承され、文法形態はア

ルタイ系言語Bから借用されることになるので、この仮説の蓋然性が一番高いとする。

しかし、日本語の形成過程はより複雑で、かつより多くの同語族内の言語や方言の存在を認めなければならず、ツングース（アルタイ）系の基礎語彙の存在が「言語入れ替え」を行ったことを明確に示している。したがって、総合的に判断すれば、この説がより現実的でさらに言語学的裏付けも十分になされ、事実即して最も合理的な説明となっている。筆者もこの説に賛同する。

さらに、板橋（2014：37）においては、縄文語と弥生語、古代日本語と古代琉球語の位置付けを下の図のように解釈している。

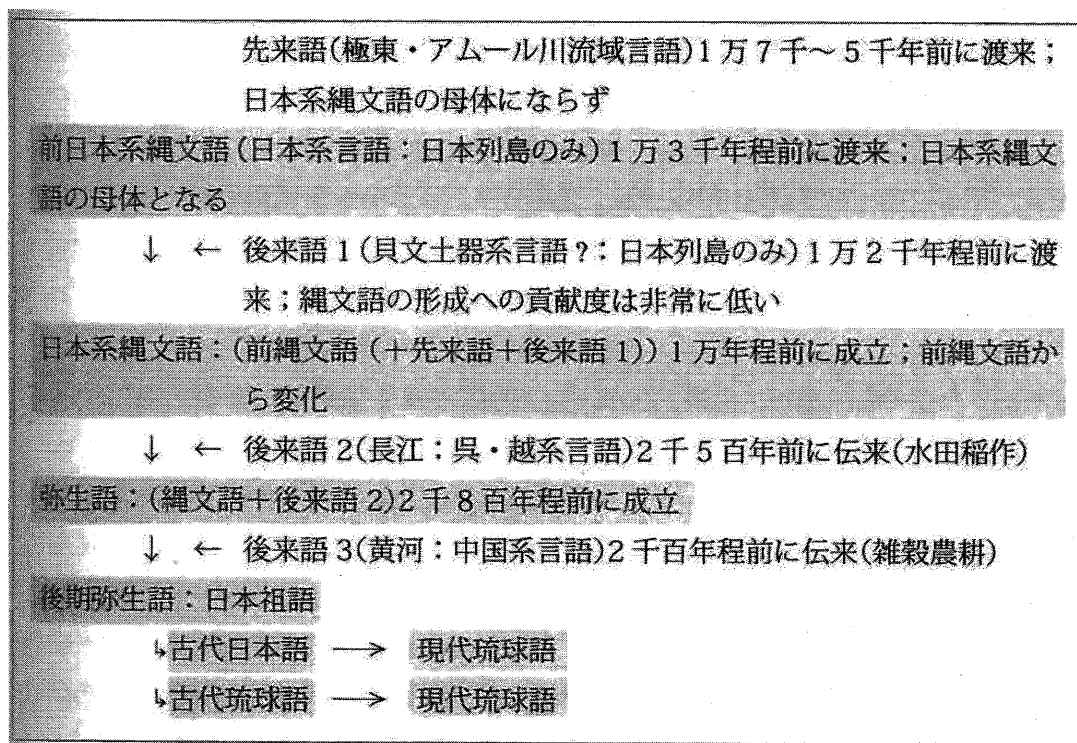


図3 日本列島における日本語・琉球語の生成・変遷（板橋 2014 による）

これらのことから、琉球語の成立過程を考える上で、オーストロネシア系言語との接触は否定できない。むしろ、積極的にオーストロネシア系言語との比較を考慮し、さらに周辺言語との接触も視野に入れて、成立過程を考察する必要がある。特に、琉球語と韓半島の言語とオーストロネシア系言語との比較を重要視し、加えてツングース（アルタイ）系言語との比較を行う必要があることは言うまでもない。

板橋（2014：37）において板橋氏は、日本系縄文語に 2,500 年前に水田耕作の伝来とともに、後來語である長江由来の呉・越系言語が接触して弥生語が 2,800 年前に成立し、2,100 年前に雑穀農耕の伝来とともに後來語である黄河由来の中国系言語が接触して後期弥生語が成立した、これが日本祖語であると捉える。この日本祖語から古代日本語と古代琉球語が分岐して、古代日本語は現代日本語、古代琉球語は現代琉球語に引き継がれたと解釈している。

筆者は、板橋氏の後期弥生語までの成立過程について、分子生物学（DNA）・遺伝子学・考古学を援

用して立案された成果であるので、賛同する立場である。ただし、日本祖語から琉球語が成立するまでの過程が、Chambalain (1895) と同様の解釈である点、考察の余地があるものと思われる。最新の分子生物学 (DNA)・遺伝子学による、「琉球の祖先の移動」について明らかになっていることから、この点についても考察していきたい。

4. 新説の提唱

トマ・ペラール (2013 : 83) においては、複数の「琉球諸語」を認め、日本語を単一言語ではなく多様な語族とみなし、「日琉語族」という名称を使った方が妥当であるとして、以下の系統図を掲げている⁽¹⁾。

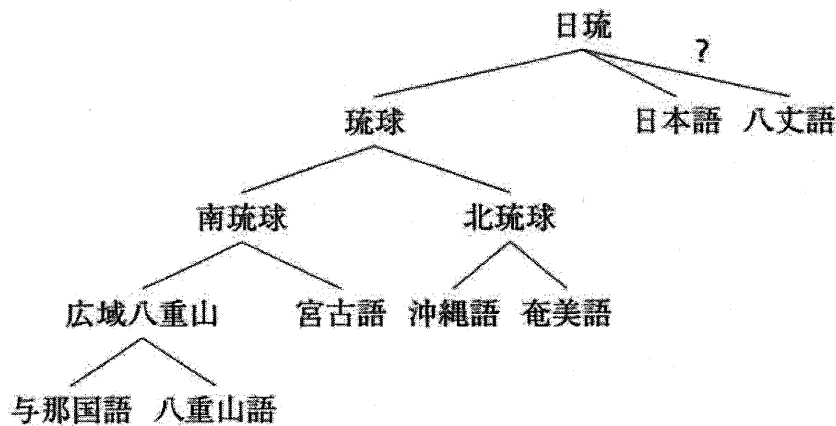


図4 日琉語族の系統図 (トマ・ペラール 2013 による)

五十嵐 (2016 : 3) において、旧説のトマ・ペラール (2013 : 83) を基に、一部改訂して作成した系統樹を次頁のように掲げている。八丈方言は省略、九州方言と中央方言以外の日本語の諸方言も省略されている。

この説に対する反論を挙げ、下記の結論を提示している。

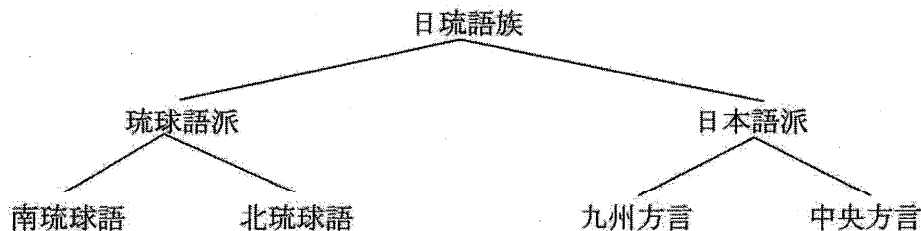


図5 旧説における日琉語族の系統図 (五十嵐 2016 による)

(1) 上の系統樹に基づくと、琉球語とともに九州の諸方言が、奈良時代より前に、中央語から分岐

したことになる。

- (2) 中央語からの分岐後、琉球祖語話者は九州にとどまったが、10C～12C に琉球列島に移住し、九州に残った琉球語話者は、中央日本語に言語を置き換え、九州の琉球語は痕跡を残さずに消滅したとする説 (Pellard 2015) は再考すべきだろう。
- (3) 奈良時代より前に中央語から分岐したのは、九州・琉球祖語であり、この言語は九州で話されていた可能性がある。10C～12C に琉球列島に移住したのは、九州・琉球語派の一方言の話者であり、この話者の方言が琉球祖語である (すなわち琉球祖語の他からの分岐は琉球列島で生じた) 鰯の稚魚」という可能性を検討すべきであろう。したがって、現在の九州方言は、琉球祖語と姉妹関係にある言語 (九州語) の末裔であり、九州における言語の取り替えは起こらなかった可能性もある。(当然、九州では中央語との激しい言語接触があったに違いないが。)
- (4) 日本語と音対応のある琉球語における漢語の存在も、(九州で話されていた) 九州・琉球祖語の段階で、中央日本語から借用された可能性がある。

そして、五十嵐 (2016 : 3) では、以下の新しい系統樹を提案している。

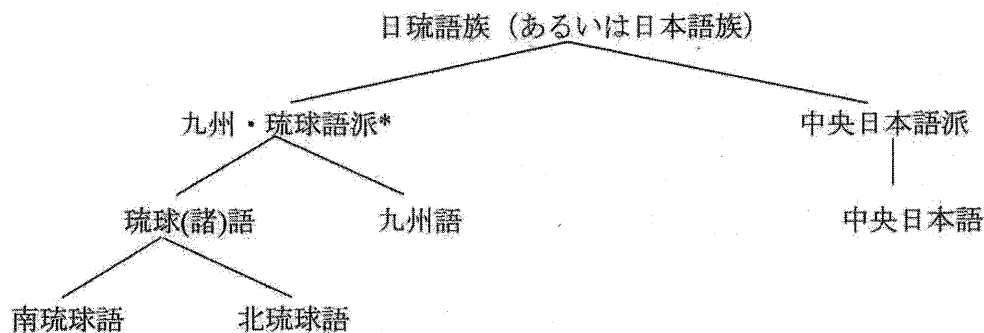


図6 五十嵐氏提案の新しい系統樹 (五十嵐 2016 による)

五十嵐 (2016 : 5-12) では、九州方言と琉球語のみが共有する事象として、母音 *ai* の改新、母音 **o*・**e* の保持、アクセント類の保持、語形改新、意味変化、同源語、文法の 4 点について例を挙げ、上記の新説の根拠としている。具体的には、以下のとおりである。

(1) 母音 *ai* の改新

- ① 琉球祖語が経験した **ai > *e* の変化が、九州の一部に認められる。現代九州諸方言の一部では、上二段活用動詞の未然・連用語幹の語幹末母音は */e/* であり、下二段活用動詞と区別がない (服部 1979 : 101 ; 上村 1983 : 17)。

- ② 現代九州方言では、「木」を意味する *ke* は確認できないが、『日本書紀』景行紀に九州の地名として「木」を含む地名 (「ミケ」) が認められ *ke*₂ (乙類のケ) で現れる。

奈良時代の九州方言では *ke* 「木」が使われており (服部 1979)、その後、中央日本語の *ki*

「木」に取って代わられた可能性がある。

③ 以上のことから、九州方言は中央日本語に生じた **ai* (>*i*₂~*o*₂) >*i* を経験しておらず、かわりに琉球祖語が経験したものと同じ **ai* > **e* を経験した可能性が高いと言える。

④ したがって、九州方言は他の中央日本語から奈良時代以前に分岐したことが示唆される。また、改新 **ai* > **e* の共有から九州方言と琉球語が系統群をなす可能性が示唆される。

(2) 母音 **o*・**e* の保持⁽¹²⁾

① 琉球祖語において母音 **o*・**e* が再建される語彙について、九州方言（主として鹿児島方言の一部の語彙において共有している。**moko* 「婿」、**omi* 「海」、**meNtu* 「水」、*memNsV* 「蚯蚓」など。

② このことから、**e* > **i*、**o* > **u* の変化はすべての日本諸方言が共有しているわけではないことが明らかになり、**e* > **i*、**o* > **u* の変化は「日本語派」を定義する特徴とはなりえない。

③ したがって、この変化を生じた中央日本語は、古形を保持する九州方言（および非中央系の日本語方言）から奈良時代以前に分岐したことが示唆される。

(3) アクセント類の保持

① 日本諸方言が共有しているはずの類の統合は、九州方言の一部（佐賀県杵島方言）には認められず、琉球諸方言にのみ保持されている {2.4a} {2.4b} の区別と {2.5a} {2.5b} の区別が保持されている（五十嵐・平子 2016）⁽¹³⁾。

② このことから、合流 {2.4a,2.4b} と合流 {2.5a,2.5b} はすべての日本語諸方言が共有しているわけではないことが明らかになる。

③ したがって、この変化（合流）は「日本語派」を定義する特徴とはなりえない。

④ さらに、九州方言は、中央日本語から少なくとも平安時代末期時代以前に分岐したことが示唆される。

(4) 語形改新

① 基本的な語であり、借用語の可能性が低い **suba* 「唇」、**ado* 「踵」、**iriko* 「鱗（ふけ）」、**jokoi* 「休息」などは、九州方言と琉球語のみが共有する語形改新である可能性が高い。

② **kamme-* 「頭に載せて運ぶ」に関しては、大分・熊本に *kamuge-* があり（東條 1951）、これが古形であろう。島根、広島には *kane-* があるが（東條 1951）、これは **kamuge-* > *kene-* という語形改新（九州とは異なるタイプの改新）の結果であろう。

③ これらの語形改新が、並行変化の結果（その可能性は低いだろう）でもなく、かつ借用の結果でもないのであるならば、問題の改新は、琉球語と九州方言からなる系統群を定義するものとなりうる。

(5) 意味変化

・ 問題となっている **sone* 「山頂付近の平坦地？」 > 九州方言（壱岐・五島・甑島・屋久島）・琉球祖語「海中の魚の取れる瀬」、**podo* 「程」 > 九州方言（壱岐・佐賀・熊本・鹿児島）・琉球祖語「身長」、**sugarV* 「蜂」 > 九州方言（種子島）「蛸」・琉球祖語「手長蛸・飯蛸」などの意

味変化が並行変化でないのならば (*ozom-「恐れる」>「目覚める」はその可能性が高いか)、あるいは意味変化をおこした語の借用の結果 (*wogi「荻」>「砂糖黍」などはその可能性が高いか) でなければ、九州・琉球語派を定義づける改新とみなしうる。

(6) 同源語⁽¹⁴⁾

- ・ 問題となっている九州方言イヤ「胞衣」・琉球祖語*ija「胞衣」、九州方言ハベロ「蝶・蛾」・琉球祖語 pa-bero(?)「蝶」、九州方言タマシ「分け前」・琉球祖語 tamasi「分け前」、九州方言アボ「断崖」・琉球祖語*abo「深い縦穴」、九州方言アカマメ・*aka-mamae「小豆」、九州方言カラハイ「灰」・琉球祖語*kara-pai「灰」、九州方言ガジャブ「蚊・蚋」・琉球祖語*kazamV「蚊」、九州方言タミナ「田螺」・琉球祖語*ta-mina「田螺」、九州方言シキリ「海鼠」・琉球祖語*sikiri「海鼠」、九州方言マタバシ「股座」・mata-basi「股座」、九州方言チクラ「鰐の稚魚」・琉球祖語*tikura「鰐の稚魚」、九州方言セセカウ「用事が重なる」・*sesekaw-「用事が重なる」、九州方言バカウ「奪い合う」・琉球祖語鰐の稚魚 bakaw-「奪い合う」、九州方言イーシ「唾者」・琉球祖語*isa(?)「唾者」などが日琉祖語における古形の保存でなく、また借用語でないならば、九州方言と琉球語の共通祖語の段階で生じた新語ということになり、九州・琉球語派を定義づける改新とみなしうる。

(7) 文法

- ① 古形でなく、かつ借用でなく、かつ並行変化でなければ、九州・琉球語派を特徴づける改新であるが、不明な点が多い。
- ② 九州方言と琉球方言を比較しても、動詞の伴う接辞に差異があり、完全に一致しない。たとえば、佐賀方言は「取りガに行った」(取りに行った)であるのに対して、琉球語宮古池間方言は「取るガに行った」である。また、佐賀方言は「嬉しサにする」であるのに対して、琉球語宮古池間方言は「悲しサする」である。
- ③ 古形、借用、並行変化の可能性を否定できるかの検討は今後の課題である。

以上が、五十嵐 (2016) が示した「九州・琉球語派」を認めることの根拠である。

筆者は、この「九州語」を認める意見には賛同する。ただし、九州語の位置づけについては、異論がある。なぜならば、上でも述べたとおり、分子生物学 (DNA)・遺伝子学・考古学・言語学の学際研究の立場から導き出された日本列島の言語史は、「九州語派」から「琉球語派」へと分岐したと見なす方が、これまでの矛盾点を解消してくれるからである (崎谷 2009a、2009b)。

五十嵐 (2106) で提示された、九州方言と琉球祖語の同源語、文法、アクセントの共有を補足するならば、以下の点を挙げることができる。

(1) 同源語

① 地名「原」(ばる)「原」がついて「ばる」と読む地名

これについては、ウェブサイト「『～原』を『ばる』『はる』と読む地名」(<http://www.shochian.com/harubaru.htm>) に詳しい。それには、該当する地名が、全国 99 箇所あり、そ

のうち 97 箇所が九州・沖縄に偏在していることが示されている。

福岡県は 27 箇所：飯原^{いはいばる}、荷原^{いはいばる}、柿原^{かきばる}、春日原^{かすがばる}、上原^{かみばる}、九郎原^{くろうばる}、黒原^{くろばる}、郷原^{ごうばる}、笹原^{ささばる}、塩原^{しおばる}、白木原^{しらきばる}、新田原^{しんでんばる}、陣の原^{じんばる}、新原^{しんばる}、太郎原^{だいろばる}、茶屋の原^{ちややはる}、唐原^{とうのはる}、塔原^{とうのはる}、道原^{どうばる}、原^{はる}、檜原^{ひばる}、平原^{ひらばる}、前原^{まえばる}、女原^{みようばる}、屋形原^{やかたばる}、夕原^{ゆうばる}、柚須原^{ゆすばる}、佐賀県は 2 箇所：中原^{なかばる}、養原^{みのばる}、長崎県は 2 箇所：礪石原^{くれいしばる}、世知原^{せちばる}、大分県は 24 箇所：秋原^{あきばる}、大原^{おおはる}、乙原^{おとばる}、柏原^{かしわばる}、北原^{きたばる}、机張原^{きちようばる}、城原^{きばる}、小池原^{こいけばる}、古賀原^{こがのはる}、神原^{こうばる}、下原^{しもばる}、庄の原^{しょうはる}、城原^{はる}、杉原^{じょうはる}、杉原^{すぎばる}、旦野原^{だんのはる}、長者原^{ちようじゃばる}、角子原^{つのごはる}、中原^{なかばる}、野津原^{のつはる}、拝田原^{はいたばる}、日吉原^{ひよしばる}、都原^{みやこばる}、向原^{むかいばる}、吉野原^{よしのはる}、熊本県は 11 箇所：上原^{うわばる}、岡原^{おかはる}、小原^{おばる}、久原^{くばる}、小原^{おばる}、合ノ原^{ごうのはる}、下河原^{しもかわはる}、薄原^{すすばる}、田原坂^{たばるざか}、西原^{にしはる}、宮原^{みやばる}、宮崎県は 14 箇所：菖蒲原^{あやめばる}、糸原^{いとばる}、大内原^{おおうちばる}、川原^{かわばる}、楠原^{くすばる}、久保原^{くぼばる}、西都原^{さいとばる}、高原^{たかはる}、田原^{たばる}、茶臼原^{ちやうすばる}、塚原^{つかばる}、新田原^{にゅうたばる}、稗原^{ひえばる}、餅原^{もちばる}、鹿児島県は 9 箇所：旭原^{あさひばる}、小野原^{おのばる}、柊原^{くぬぎばる}、崎原^{さきばる}、永小原^{ながおばる}、西紫原^{にしむらさきばる}、根木原^{ねぎばる}、東原^{ひがしばる}、紫原^{むらさきばる}、沖縄県は 8 箇所：伊原間^{いばるま}、西原^{いりばる}、宇栄原^{うえばる}、連天原^{うんてんばる}、桃原^{とうばる}、南風原^{はえばる}、南桃原^{みなみとうばる}、与那原^{よなばる}である。

その他として、富山県の 2 箇所：針原新町^{はりばるしんまち}、針原中^{はりばるなか}があるが、おそらく九州からの移住者が開いた新地などである可能性が高い。いずれにせよ、これだけ九州と琉球に偏在しているのは、同源語と見なさざるを得ない。この「原」(ばる)は、朝鮮語の「原」を意味するボル邐、「村、部落、里、郷、洞里」を意味するマウル마을と同源と考えられる。

② 粳(うるち)

「うるち」は主食として食べる普通の米で、「もち」は餅や赤飯を作るときの米と区別される。九州南半から琉球にかけてシヤク類が分布している(佐藤亮一監修/小学館辞典編集部編(2002:171)。中本正智氏によれば、シヤクはサクからの変化形で、サクのサは朝鮮語につながるのとこと。中本(1992:251)には、粳の方言形として、次の記述がある。

ウルシネ　うるち　愛知県愛知郡
キチ　うるち　徳島、高知
キチマイ　うるち　淡路、徳島、高知
サクグミ　うるち　沖縄
シヤクノコメ　自家用の飯米　愛媛県喜多郡
うるち　鹿児島
シャチ　うるち　鹿児島
ジュコー　うるち　奄美徳之島

中本(1992:257)には、「琉球列島で、うるちのことをサクグミという。このサクは九州、四国にシヤク、シャとあるが、おそらく朝鮮語のサル(米)とつながるであろう」とある。米を表す朝鮮語はサル s'al または pekmi である。サルが本来の朝鮮語で、ペクミは白米という漢語である。

シャクノコメは、愛媛県で「自家用の飯米」と意味変化を起こしている。鹿児島島の「うるち」が本来の意味であろう。したがって、粳を表すシャク類は、同源と考えられる。

③ 蜘蛛

第二音節が m にならず b になる語形のうちコブが九州に分布域をもっている。琉球列島のクブは、音韻対応の関係から、また地理的な面から、コブの変化形と考えられる。分布が九州から琉球列島へ連続している。コブはクボの母音のメタデーゼ（音位転倒）と見なされ、クボが出發形と考えられる。琉球のクブは、クボ kubo > コブ kobu > クブ kubu の変化によって生じたと考えられる。したがって、九州のコブと琉球のクブは同源と考えられる（佐藤亮一監修／小学館辞典編集部編 2002 : 294）。

(2) 文法⁽¹⁵⁾

ここでは、五十嵐（2016 : 12）で掲げる、佐賀方言の「取りガに行った」（取りに行った）と琉球語宮古池間方言の「取るガに行った」、佐賀方言の「嬉しサにする」と琉球語宮古池間方言の「悲しサする」との比較よりも、九州方言と琉球諸方言との関連性が、より確実な例を挙げることにしたい。

秋山正次氏は『肥後の方言』（1979 : 110-112）において、「南島方言の断定終結表現法」を紹介している。熊本方言における終止的断定表現を避ける特徴が、琉球諸方言と共有している事実について述べている。

(共通語)	きれいな花は	菜種で、	白いのは	大根だ。
首里	チールパナー	ナー□	シルーヤ	デークニ□
大嶋	キーバナヤ	ナタに□	リュサムンナ	デンクニト ⁽¹⁶⁾
国頭	モーラールパナー	ナーヌパナ□	シューサルモノー	デークニ□
宮古	きるパナア	ナダニ□	ススムノを	ウプニ□
八重山	キンキンヌパナー	ナー□	すすパナー	ダイクニ□

(ーを付したところは断定辞。□は零記号の断定陳述)

(3) アクセント⁽¹⁷⁾

アクセントの分布では、西南部九州のアクセントは「語声調」であり、琉球語にもつながるという捉え方が早田（1977 : 30）で提唱された。早田輝洋氏は、九州西南部から奄美。沖縄にかけて分布する「語声調」のアクセントが、朝鮮半島南部や大陸の中国にも分布していることを示している。その図を、以下に掲げておく。

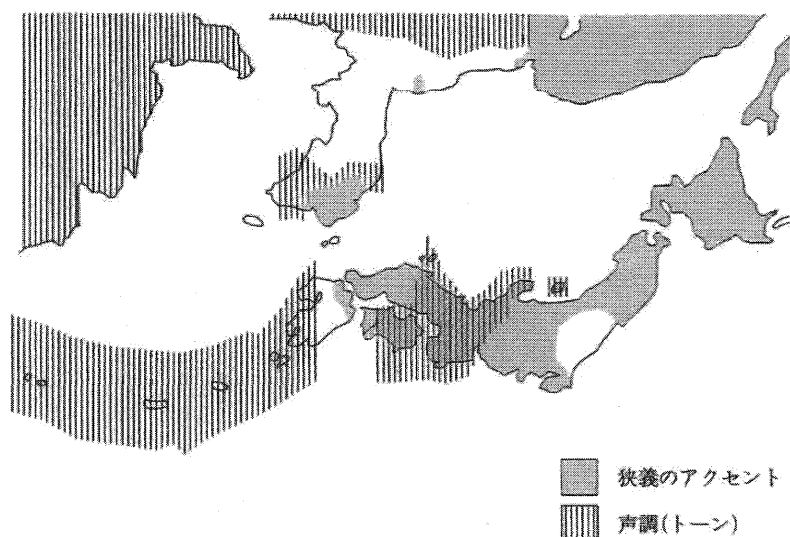


図7 日本およびその周辺のアクセント分布(早田 1977による)

さらに、崎村（2006）において、九州から琉球にかけて同じ性質のアクセントが分布していることを実証している。崎村弘文氏は、首里方言と鹿児島市方言の複合語のアクセント法則が類似していることも明らかにしている。

以上のことから、筆者は五十嵐氏と同様に「九州語」を認める立場であるが、日琉語族（あるいは日本語族）から、「九州・琉球語派」と「中央日本語派」とに分岐し、「九州・琉球語派」はさらに「琉球（諸）語」と「九州語」とに分岐するとした説には、異論を唱えたい。下記に、筆者の考案した新・琉球語系統樹を掲げる（ここでは、西部日本語派、東部日本語派、南琉球語、北琉球語の下位分類語については省略する）。

筆者は、「琉球語」は「九州語派」からの分派と見なす。板橋（2014：37）を参照すれば、「日本系縄文語」から「弥生語」そして「後期弥生語」へと引き継がれた。これが「日本祖語」である。「日本祖語」は、「原日本語」へと引き継がれ、「九州語派」と「西日本語派」と「東日本語派」とに分岐し、さらに「九州語派」は「琉球語派」に分派し、「九州語派」は「西九州語」「南九州語」「北東部九州語」、「西日本語派」は「山陽山陰語」「四国語」「関西語」「出雲語」「北陸語」「中京語」となり、「東日本語派」は「東海東山語」「関東語」「八丈語」「東北語」となり、「琉球語派」は「南琉球語」と「北琉球語」に分岐、「南琉球語」はさらに「与那国語」「八重山語」「宮古語」、「北琉球語」はさらに「北部沖縄語」「中南部沖縄語」「奄美語」に分岐する。これが、筆者の考える「琉球語系統論」である。

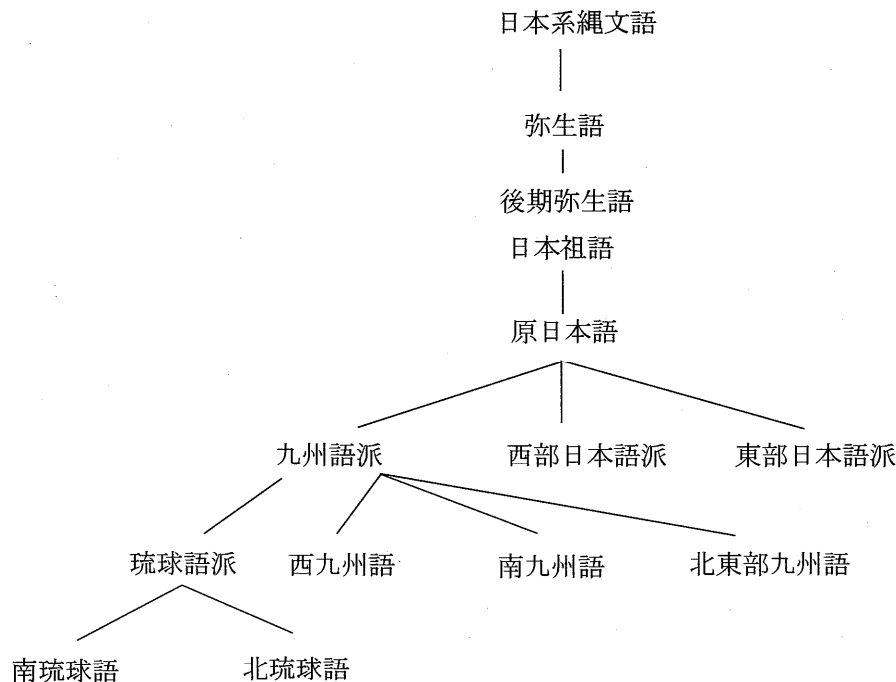


図8 筆者による新・琉球語系統樹

板橋 (1998 : 13) によると、古代日本語と琉球語、現代日本語と琉球語から、対格接語の「日本（・琉球）祖語」を再構すれば $*ba$ となり、「原日本（・琉球）語」においては $*ba/*wo_2$ のように両形に分離すると捉えている。さらに、「原琉球語」では $*ba/*wo$ 、「古代琉球語」では $*ba/yo$ 、「近代琉球語」では $ba/yo/yu$ 、「現代琉球語」では ba/yu へと移行し、一方、「古代日本語」では ba/wo 、「近代日本語」では ba/o 、「現代日本語」で ba/o へと移行すると見なしている。

筆者の考える「原日本語」は、九州語派、西部日本語派、東部日本語派の祖形とする。「日琉祖語」は認めない立場である。しかし、板橋氏の対格接語の考察と対照させるならば、「日本祖語」では $*ba$ 、「原日本語」では $*ba/*wo_2$ 、九州語派では $*ba/*wo$ へと移行したと考える。これは、板橋 (1998 : 13) における「原琉球語」と同形であるが、筆者は、これが琉球語派へと移行したと捉える。さらに、「琉球語派」では $*ba/yo$ 、そして「南琉球語」では $ba/yu \cdot u$ 、北琉球語では ba/\emptyset へと移行するものと見なす。この解釈は、分子生物学 (DNA)・遺伝子学・考古学の最新の成果と合致する。

5. おわりに

五十嵐論文に端を発して、「琉球語系統論」を再考し、新説を提示することができた。琉球語の祖形を再構する際、本土諸方言から再構した日本祖語と琉球語祖形の共通祖形を再構するよりも、九州語派を設定する方が妥当である。九州語派は琉球語派へと分派することで、比較的新しく成立した琉球語の保守性も説明できる。琉球語において、奈良時代 (7世紀前後) の古語が確認できるのは、10世紀前後の九州語の名残であると解釈できるのは、九州語派の保守性と琉球語派への分派によるタイムラグと解釈することができる⁽¹⁸⁾。

国立遺伝学研究所の斎藤成也氏は、斎藤（2016：92-93）において、「沖縄に稲作が伝えられたのは、11世紀後半にはじまった原グスク時代だと推定されているが、このときに古代日本語も伝わって、それまで沖縄地域で話されていた言語と置き換わった可能性がある。グスク時代には、沖縄のあちこちで山城（琉球語でグスク）が建造されたが、築城技術を含めて九州および日本本土からもたらされたものであろう。（略）「エリート・ドミナンス」が沖縄の言語にあてはまるとすれば、日本語と琉球語の分岐は、たかだか1,000年ほど前だということになる」と述べている⁽¹⁹⁾。

この説と同様の意見が、考古学の立場から分析された高宮（2013：191）において、展開されている。「琉球方言の成立」の項では、「先史時代におけるヒトの集団の移動は、じつは言語学からも指摘されていた。服部（1998）6は言語年代法（言語学の手法で二つの言語が分岐した年代を推定する方法）により、琉球方言と日本語が分岐したのは1,500年ほど前と考えた。また外間（1977）は両方言が分岐したのは2～3世紀から7～8世紀と想定し、このころ九州からヒトが琉球列島に移動したという仮説を提唱した。考古学や人類学はこの指摘に対応するのに時間を要したが、近年のデータの蓄積は、言語学の指摘を支持すると思われる」と述べている。

ただし、琉球方言成立の年代は服部や外間の想定した年代とは異なる。「奄美・沖縄諸島および先島諸島に「突然」農耕がはじまり、グスク時代初期の三点セット⁽²⁰⁾など新たな文化要素が広まった11～12世紀であったであろう。このように多くのデータは先史時代末からグスク時代にかけてヒトの移動があったことを示唆しているように思える」と、従来の言語学・方言学の説よりも後の年代を設定している。

この「琉球方言」を「琉球語」に置き換えれば、分子生物学（DNA）・遺伝子学・考古学による見解が、「琉球語」が分岐したのは11～12世紀のグスク時代ということになる。筆者も、ただ単に農耕が琉球に言語を伝播させたというよりも、軍事的、政治的な支配者の言語が広まっていったと見なす「エリート・ドミナンス」の理論を用いた方が、先のタイムラグを適切に説明できるものと考ええる。

【注】

- (1) ジャポニック語（Japonic Language）という名称については、Serafim（2004）、セラフィム（2008）、Bentley（2008）参照。
- (2) 五十嵐（2016）は、旧説の問題点について、以下の2点を挙げている。
 - ・琉球語諸方言に観察され、日本語諸方言に観察されないとされてきた言語改新の一部は、日本語九州方言の一部に観察される。
 - ・日本語諸方言に観察され、琉球語諸方言に観察されないとされてきた言語改新の一部は、日本語九州方言の一部に観察されない。
- (3) 板橋（2014：36）において、「近年は隣接分野の形質人類学、考古学、遺伝子学などの研究成果を基盤にして、言語学においても最新の研究方法論は非常に包括的になってきており、言語・方言圏論、比較言語学、接触言語学、地域類型学を縦横無尽に駆使し、その時代の言語状況を把握していく方法を最善策としている」と説いている。筆者も、この方法論に従う。

- (4) (板橋 2014 : 29-30) において、「Y 染色体 (=男性染色体) については、父方の男性 Y 染色体が直接息子にのみ継承されるので、その継承された Y 染色体から遡り、初めに渡来した男性 (日本人 Adam) を特定できる。即ち、縄文人男性が日本列島に渡来した時期と場所をある程度特定することができる」と説いている。なお、日本人のもつ Y 染色体 DNA については、篠田 (2015 : 140-145) 参照。
- (5) 崎谷 (2008 : 122)、崎谷 (2009b : 071) 参照。
- (6) 崎谷 (2008 : 122) 参照。
- (7) 崎谷 (2008 : 123) 参照。旧石器時代からグスク時代、グスク時代と現代のミトコンドリア DNA については、(2015 : 150-163) 参照。
- (8) (板橋 2014 : 20-21) において、「女性であれ男性であれ、その人の持つ mtDNA (ミトコンドリア DNA: カッコ内は筆者) は母から子へと継承される (その子が男であれ女であれ、その母方の mtDNA が継承され、父方の mtDNA は抹消され子には継承されない) ので、その人の母方の祖先はその多型の DNA を持ち、それを遡ると人類の共通祖先の女性 (Eve といわれる) までたどり着く。従って、日本人の遺伝的起源を考える時、現在日本人に存在するすべての多型の系統を探索することにより、その総体が日本人の女性の遺伝的起源 (日本人 Eve) となる」と説いている。なお、日本人のミトコンドリア DNA については、篠田 (2015 : 134-140) 参照。
- (9) 篠田 (2007b : 111-113)、篠田 (2015 : 153・209) 参照。
- (10) 崎山 (2009 : 45) は、Ma は極東・アムール川流域にも見られるほか、シベリア南部 (ブリヤート)、東南アジアにも見られるとし、発生したのはシベリア南部、あるいは極東辺りと予想する一方、台湾先住民にも台湾漢民族にも存在せず、台湾から北上して日本鉄塔に入ったものではないとし、埴原 (1996) の「二重構造モデル」は成立しないとしている。
- また、(崎谷 2009b : 35-38、52) では、東アジアのヒト集団は北ルートから南下したことを示し、南ルートからの北上は非常に限定的で日本列島には及ばなかったと述べている。これについては、板橋 (2014 : 27) において、「M7b、M7c 等が台湾を中心に拡大していることから、M7 は北上ルートでシベリアに達したと考えるのが一般的であると考えられる。従って、近年では崎谷の説は一般的に受け入れられていない」と反論している。筆者も、この説に賛同する。
- (11) トマ・ペラール (2013 : 83) では、「八丈語も認めるが、その系統的な位置はまだ明らかにされていない」とし、図中に ? を付している。
- (12) 母音 *o、*e の再建に関しては、Pellard (2008、2013、2015) 参照。
- (13) 日本語と琉球語の比較から、日琉祖語の 2 音節名刺には、8 種類のアクセント類 (2.1, 2.2, 2.3a, 2.3b, 2.4a, 2.4b, 2.5a, 2.5b) が再建される (服部 1979 ; 松森 1998)。このうち、2.3b 類は所属語彙が少ないので除外すると、琉球祖語と平安時代末期の中央日本語とのアクセント類の対応は、以下のとおりである (五十嵐 2016 : 7)。

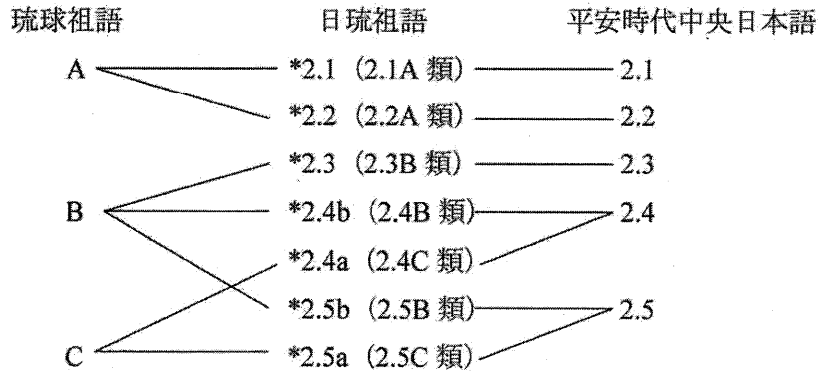


図9 琉球祖語と平安時代末期の中央日本語とのアクセント類の対応

- (14) 九州方言と琉球語のみが共有する同源語の選定には、野原（1979-1983）、伊波（1974）を参照。
- (15) 杉村（2010：50）参照。
- (16) 秋山（1979：111）は、「大嶋のドは推量断定であろう（終結断定にもなり得る）」と解釈している。
- (17) 杉村（2010：51）参照。
- (18) 九州語派の保守性と琉球語派への分派によるタイムラグと考えれば、五十嵐（2016）における系統樹による「九州・琉球語派」を立てる必要はなくなる。
- (19) 「エリート・ドミナンス」については、斎藤（2016：15）参照。
- (20) 「グスク時代初期の三点セット」とは、カムイヤキ、滑石製石鍋および中国産陶器のことである。

【引用・参考文献】

- 秋山正次（1979）『肥後の方言』桜楓社
- 五十嵐陽介（2016）「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか？
—「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱— 国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本語学史の光と影」第3回共同研究会発表レジュメ：1-14
- 五十嵐陽介・平子達也（2016）「『肩・種・汗・雨』と『息・舟・桶・鍋』がアクセント型で区別される日本語本土方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較」第30回日本音声学会全国大会（2016年9月17日、早稲田大学）
- 板橋義三（1999）「『混成言語と日本語の形成』」『比較社会文化』第7巻（九州大学大学院比較社会文化研究科紀要）：41-55
- 板橋義三（2014）『アイヌ語・日本語の形成過程の解明に向けての研究—地域言語学、言語類型論、通時言語学を基盤にした学際的アプローチ』現代図書
- 伊波普猷（1974／1939）「琉球語と壱岐方言との比較対照」『伊波普猷全集』第4巻 平凡社：233-276
- 上村孝二（1983）「九州方言概説」『講座方言学 九州地方の方言』国書刊行会
- 斎藤成也（2005）『DNAから見た日本人』ちくま新書

- 齋藤成也 (2015) 『日本列島人の歴史』 岩波ジュニア新書
- 齋藤成也 (2016a) 『歴誌主義宣言』 ウェッジ
- 齋藤成也 (監修) (2016b) 「言語、骨から見た日本人のルーツ～新時代区分で古代史を描く～」 『DNA でわかった日本人のルーツ』 宝島社：92-93
- 崎谷 満 (2005) 『DNA が解き明かす日本人の系譜』 勉誠出版
- 崎谷 満 (2008) 『DNA でたどる日本人 10 万年の旅－多様なヒト・言語・文化はどこから来たのか?』 昭和堂
- 崎谷 満 (2009a) 『DNA・考古・言語の学際研究が示す新・日本列島史－日本人集団・日本語の成立史』 勉誠出版
- 崎谷 満 (2009b) 『新日本人の起源－神話から DNA 科学へ』 勉誠出版
- 崎村弘文 (2006) 『琉球方言と九州方言の韻律的研究』 明治書院
- 崎村弘文・木部暢子 (2009) 「沖縄、中国へつながる九州方言」九州方言研究会編『これが九州方言の底力!』 大修館書店
- 佐藤亮一 (監修) / 小学館辞典編集部 (編) (2002) 『お国ことばを知る 方言の地図帳』 小学館
- 篠田謙一 (2007a) 『DNA が語る・考古・言語の学際研究が示す新・日本列島史－日本人集団・日本語の成立史』 勉誠出版
- 篠田謙一 (2007b) 『日本人になった祖先たち－DNA から解明するその多元的構造－』 NHK 出版
- 篠田謙一 (2015) 『DNA で語る日本人起源論』 岩波書店
- 杉村孝夫 (2010) 「九州方言音声の諸相」 『福岡教育大学紀要』 第 59 号：49-64
- セラフィム・レオン. (2008) 「琉球語の歴史・〈誕生〉から近現代まで」 (2008 年 11 月 29 日に開催された基調講演資料)
- 高宮広土 (2005) 「沖縄諸島先史時代からのメッセージ」 『島の先史学－パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代－』 ボーダーインク
- 高宮広土 (2010) 「南西諸島の先史学」 『考古学ジャーナル』 第 597 号
- 高宮広土 (2013) 「第 5 節 奄美・沖縄諸島へのヒトの移動」 印東道子 (編) 『人類の移動誌』 臨川書店：182-197
- 東條 操 (編) (1951) 『全国方言辞典』 東京堂出版
- トマ・ペラル (2013) 「日本列島言語の多様性－琉球諸語を中心に－」 田窪行則 (編) 『琉球列島の言語と文化－その記録と継承－』 くろしお出版：81-92
- トマ・ペラル (2016) 「日琉祖語の分岐年代」 田窪行則 / ジョン・ホイットマン / 平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語』 くろしお出版：99-124
- 中本正智 (1992) 『日本語の系譜 (新版)』 青土社
- 野原三義 (1979-1983) 「琉球方言と九州諸方言との比較 (I-V)」 『沖縄国際大学文学部紀要』 第 8 巻 第 1 号、第 9 巻第 1 号-第 2 号、第 10 巻第 1 号、第 11 巻第 1 号-第 2 号、第 12 巻第 2 号
- ハインリッヒ・パトリック (2010) 「琉球列島における言語シフト」 ハインリッヒ・松尾慎 (編) 『東

- アジアにおける言語復興』三元社：147-173
- 服部四郎（1979）「日本祖語について（21-22）」『月刊言語』第8巻第11号：97-107、第8巻第12号：504-516
- 早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』大修館書店
- 外間守善（1977）「沖縄の言語と歴史」『岩波講座日本語』岩波書店
- 松森晶子（1998）「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙2拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』第114号：85-114
- 宮良信詳（2011）「ジャポニック語族の中の琉球語派：系統、体系、及び現況」『琉球諸語記録保存の基礎』12-41 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（言語ダイナミクス科学プロジェクト）：12-41
- ローレンス・ウェイン（2006）「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』第100号：101-118
- Bentley, John.R. (2008) A Linguistic History of the Forgotten Islands. A Reconstruction of the Proto-Language of the Southern Ryukyus. Folkstone: Global Oriental.
- Chamberlain, Basil Hall (1895) Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language (Supplement to vol.23. The Transaction of the Asiatic Society of Japan) .山口栄鉄（編訳・解説）（2005）『琉球語の文法と辞典』那覇：琉球新報社.
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archeology of the Ryukyu Island. In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use, 14-37. Berlin: DeGruyter Mouton.
- Serafim, Leon.A. (2004) When and From Where Did the Japonic Language enter the Ryukyus? A Critical Comparison of Language, Archaeology, and History. In : アレキサンダー・ボビン&長田俊樹（編）『日本語系討論の現在：Perspectives on the Origins of the Japanese Language』京都：三省堂：814-829

【引用・参考 URL】

<http://shochian.com/harubaru.htm>（「～原」を「ばる」「はる」と読む地名）

（はしお なおかず・本学教授）